

第2回（仮称）都市のランドデザイン有識者委員会 議事概要 まとめ

プレゼンテーション

久保田 尚 副委員長

「30年後の練馬のランドデザインを考える ～交通～」

- ・30年後に、レベル4の自動運転車が練馬のまちを当たり前走り回ることではない。
- ・目前に迫る超超高齢社会を迎えるまでに、まずは幹線道路をしっかりと整備すべき。そこに、さらにきめ細かい公共交通を組み合わせることが必要。今後、大事にすべきは生活道路と考える。
- ・将来、新しく普及する可能性がある乗り物は、超小型EVとフル電動自転車。フル電動自転車は80歳代の高齢者まで利用できる可能性を秘める。
- ・練馬区内の生活道路を30年かけて安全にしていく目標を立てることもあり得る。生活道路のスピードを落とすための社会実験も進んでいる。
- ・幹線道路の整備が進めば道路空間をまちづくり活用することも可能となる。

（質疑）

- ・30年後は、歩道を走る自転車はいないことを前提にしたい。
- ・人の移動速度が速くなると商売にならない。人・車・自転車の通り方などで道の差別化をすべき。
- ・30年後、幹線道路網が整備されれば、生活道路等には自動車は一定時間侵入しないようにすることが可能となり、その空間を買い物やオープンカフェなどに活用できる。
- ・住宅地である練馬に歩行者天国ができれば、安心、安全なまちづくりになる。さらに、規制緩和をすることで、夢を持った人が集まり商売が発展する、そんなまちづくりになると良い。
- ・文化的な観点からも、道路に、文化的な出し物、大道芸や演奏できるスペースがあると良い。
- ・交通の戦略としては、公共交通をきめ細かくする戦略、新しいパーソナルな乗り物が高齢者の足をカバーする戦略、の2つの方向がある。
- ・高齢者の健康寿命を延ばすという観点から、ある程度の年齢までは、ペダル付で運動していただき、90歳超の方や健康を害した方には、きめ細かい公共交通で対応するということが必要だと思う。
- ・電動車椅子は歩行者の扱いで歩道を走行できるが、自由に走行するだけのキャパシティが道路空間にないため、課題もある。まずは自転車のように車道を自立的に走るものに、1年でも2年でも長く乗ってもらうようにすることを目指すべき。

プレゼンテーション

村木 美貴 委員

「低炭素型都市づくりを練馬区でいかに実践するか」

- ・欧米の場合、将来の都市像だけでなく、数値目標がある。さらに、環境の目標値設定には高い位置づけがある。
- ・ロンドンでは、熱を分散型エネルギーにするために、熱需要マップが整備され需要が一目でわかる。また、何を導入すれば効果的かデータがあり、CO2の排出量を下げられる方法が明確となっている。
- ・練馬区のような住宅都市では何かできるのかというと、一つは拠点だと考える。エネルギーの需要が平準化し有効利用できる。エネルギー的にはこれが望ましい。
- ・札幌市では、郊外でも拠点ではエネルギー需要がある。必ずしも、郊外には機能がないのでエネルギー需要がない、だから、できないと考えると何もできないまま30年がたってしまう。川崎市の検討のように、地域の需要に応じた蓄電池の活用もある。
- ・住宅市街地での簡単な取組みとして、地区全体でCO2を下げるゲーム的な事例もある。市民の教育も大事な要素となる。
- ・イギリスでは、明確な目標値と削減義務、都市計画の規制、官・民・市場の連携により、まちづくりとエネルギーシステムの連動が進んでいる。
- ・住宅市街地では、環境ではなく、防災、安心、安全などをアピールすることも考えられる。

(質疑)

- ・低炭素型都市をつくるという戦略を考えると、拠点エリアと住宅地のコミュニティベースのアクションは可能性があるのではないか。それ以外に、練馬区では緑や農地の維持も重要な命題で、低炭素型まちづくりを考えた時に、なるべく残す、残した方が有利になる、減らすなら少なくともこうしてほしい、などの視点も考えられると良い。
- ・見えないネットワークを考えるのには規制もあり、また費用もかかるので、早めに検討した方が良い。
- ・緑の確保という視点だけでなく、災害が起きた時に生活できない状況とならないよう、何をするのかを考えるべき。
- ・欧州に比べると我が国の環境についての意識は低い。環境ではなく、安全という言葉で考えた方がよいと思う。

プレゼンテーション

今井 伸 委員

「助け合いの地域社会を構築するために（30年後を見据えて）」

- ・日本人の30年後の平均寿命の推計値は85歳から90歳。介護が必要な人は、75歳以上に急増する。70歳でも70%は働きたいと言っている。子育てを終えた世代は定住する傾向にある。そのため、現在の40歳から50歳くらいまでの方が30年後に支援が必要となる中心。
- ・国がいま考えていることは、「我が事」の意識を醸成するという。さらに具体的には、「複合課題丸ごと」「世帯丸ごと」「とりあえず丸ごと」受け止める場を設けるべきと言っている。
- ・練馬区は縦割りになっているが、人口規模の小さい自治体では先進的な取り組みがされている。ただし、人口73万人の練馬区では到底無理で、オール練馬という考え方は通用しない。
- ・練馬区では、小地域（人口1万人程度）に分割して活動の拠点を設けるべき。もう縦割りで相談窓口をやる時代は終わった。まるごと対応できるようにするにはどうするのが福祉系から見たまちづくりの一つの課題。

（質疑）

- ・都市整備の領域外である子育て、高齢者の支援施設の整備についても、空間政策として捉え直してアプローチすべき。小学校などの教育系の施設も、同様の発想で考えると、圏域を狭められる。施設整備については、いま在るものをうまく活用すると良いのではないか。
- ・既存の施設を縦割りで考えるのではなく、地域をできるだけ狭め、そこにあるものを活用するという発想で、点から面に展開する。オール練馬から考えるのではなく、1万人ぐらい小学校区ぐらいの単位で、練馬区を作り上げるというようなイメージではないか。
- ・全体的に高齢化が進むので、今55歳の方が30年後にも、誰かを守れる、健康でいられることが大事になる。縦割りでなく、ワンストップでとなれば、商店会も何かしらの役割を担って、行政につながれるというシステムがあっても良い。ものを作るよりも、ソフト的に、人と人がどのようにつながるのかという話だと感じる。
- ・都市部では買い物難民が課題になっている。商店会とタイアップして、ものを届ける等を積極的にやらなければいけないのが30年後だと思う。
- ・届ける、配達する、迎えに行くなど、便利だけを追求すると、人の生活力が弱くなるため、強い自分たちをいかに残すかも考える必要がある。魅力ある商店街にするにはどうしたらよいか、どうしたら人が来てくれるか、それを100m、200mに伸ばすにはどうしたら良いのか、そんなまちづくりが大事だと思う。その中で、商店街との関わりはある。

【テーマ全体について】

- ・ エネルギーでも、交通でも、目標を明確にすべきという指摘はその通りだと思う。ランドデザインの中で、何年か後の目標値を理解することができれば、大きな力になると思う。
- ・ 今回のプレゼンは、それぞれテーマは異なるが、練馬区に当てはめ、共通のアプローチから攻めると、うまく行くことがありそうに思う。生産緑地を例にとると、宅地化が予想される中で、エコロジカルに配慮する街、コミュニティの拠点を整備する等もあり、また、コミュニティの中で安全に暮らせるような生活道路の整備を入れ込む等も考えられる。住宅都市の練馬だからこそのアプローチから、3つのテーマを合わせた都市像、コミュニティ像が描けるのではないか。